

飛鳥大仏統考

中野 聰

はじめに

本邦最初の仏教伽藍として著名な飛鳥寺の法燈を継ぐ安居院の本堂には、同寺の本尊として制作された丈六釈迦如来坐像、通称飛鳥大仏がいまも当初の石製台座上に祀られている。このわが国最古の丈六金銅仏が飛鳥時代の仏教造像の実態を知るうえで貴重このうえ

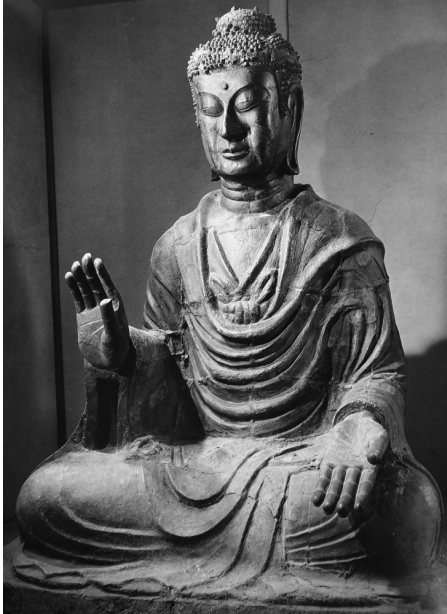


図1 銅造釈迦如来坐像（飛鳥大仏）奈良・安居院

ないことはいまさら説くまでもないが、近年私は飛鳥寺ひいては飛鳥大仏の願主である蘇我馬子の仏教信仰の内面を再検討することにより、本像の宗教的機能についての考察を試みた^①。もっとも先の拙稿では信仰史的な面に重きを置いたため、本像の造立過程や造形上の問題をめぐる考察には及び得ず、またその後新たに先稿に補足修正を加えるべき私見をも見いだしたことから、今回改めて稿を成すに至った次第である。そのような事情で、本稿では先稿に引き続き飛鳥大仏の造像過程や飛鳥寺の特質、あるいは造形と機能との関連性などを明確にしつつ本像の役割や性格について再説したい。

一、飛鳥大仏の完成年次

飛鳥大仏（図1）は現状の像高が二七五・二センチ、凝灰岩製の当初の台座上に直接安置されている。現在は独尊像の呈をなすが、台座表面の左右に両脇侍像を立たせるための枘穴が確認されるため、当初は脇侍像を伴う釈迦三尊像であったと判明する。また醍醐寺本『諸寺縁起集』所収の『元興寺縁起』がこの像の光背銘と称する丈六光銘（本稿末尾の重要史料^①）を引用することから、もとは銘文を裏面に鏤刻した光背も付属していたらしく、法隆寺金堂釈迦三尊像と同様、大光背が三尊を包摂する、いわゆる一光三尊形式の丈六金銅仏であったと推定されている。像本体については従来、建

久七年（一一九六）の罹災によって面部のごくわずかな箇所と、左耳や右手の一部を当初部として残すほか、すべては後世の稚劣な補修による造作とされてきた⁽²⁾。だが第五章で触れるように近年の蛍光X線分析装置を用いた科学調査により、当初の痕跡を留めている箇所がほかにも残存するという新情報が提出されたのは記憶に新しく、この調査結果を重視すると、本像の様式をめぐる研究も今後進展の余地を見いだし得よう。

ところで本像の完成年次について『日本書紀』は推古十四年（六〇六）のこととするが、直接光背に刻まれていた原銘文とされる丈六光銘の後半部分には推古十七年（六〇九）と記載されており、同年の完成とするみかたが有力である⁽³⁾。もっとも毛利久氏は『書紀』が推古四年に飛鳥寺伽藍が完成したという内容を記載することから、それより十年以上ものちの推古十七年によくにして本尊が完成したとは考え難いとの疑義を呈している⁽⁴⁾。そこで毛利氏は『元興寺縁起』所引の塔露盤銘（本稿末尾の重要史料②）中の「丙辰年十一月既。爾時使作□人等（後略）」なる記載に含まれる「□」の判読不明文字を「金」と解し、此処に記す「金人」を仏像の意と捉える藤澤一夫氏の説⁽⁵⁾を援用して飛鳥大仏に同定、これにより中金堂本尊である本像は丙辰年つまり推古四年の完成で、作者も『書紀』が記す鞍作鳥ではなく別の工人とみたのである。ちなみに同氏は推古十七年完成の銅の丈六仏は飛鳥大仏とは別

の像で、同年に追加建立された東西の堂舎のいずれかに安置されたと推定している。よって毛利説では同寺は一塔一金堂形式の四天王寺式に近い伽藍として一旦完成をみたが、のちの第二期工事で東西堂舎を付加して一塔三金堂形式と呼称される伽藍へと改変されたことになる。

この毛利氏の二期造営説はのちにフランソワ・ベルチェ氏が継承したが⁽⁶⁾、推古四年の飛鳥寺完成は『書紀』編者の誤解で、実際は最初に着工をみた塔の完成に過ぎず、同寺はその後長期にわたる造営工事が続いたとみる町田甲一・大橋一章両氏の一期造営説により否定された⁽⁷⁾。ことに町田氏は中金堂本尊の光背銘文たる丈六光銘自体が同十七年の完成を明記することを論拠に、毛利氏の同四年完成説を斥け、さらに大橋氏は塔露盤銘中の判読不明の一字は同銘文の他所の用例から「金」ではなく「奉」が正しいとして「金人」＝仏像説に根本的な見直しを迫っている。確かに坪井清足氏がいのように、上代寺院の造営期間はいずれの寺院も長期にわたるため、飛鳥寺のみが早期に完成したとは考え難いから⁽⁸⁾、推古四年の塔完成後も造営は連綿と継続されたのであろう。したがって根本本尊たる飛鳥大仏は光背銘すなわち丈六光銘後半部分の記載から、推古十七年に完成し、ほぼ同時に竣工したであろう中金堂に安置されたとみてよい。

ただし本稿で若干留意したいのはベルチェ氏の伽藍改造論であ

る。同氏によると飛鳥寺は蘇我氏の私寺として推古四年に百済の寺院に倣った四天王寺式に近い伽藍として完成、しかしのちの推古十三年頃に天皇の勅願寺へと様変わりしたことで、清岩里廢寺などの高句麗寺院に範を求めた一塔三金堂の官寺伽藍へと改造されたという。むろんこの論ものちに大橋氏により再考を余儀なくされており、第二期工事で飛鳥寺の官寺化を目指したとするベルチェ説は有力な根拠が得られないまま今日に至っているが、東西堂舎のプロトタイプを高句麗の伽藍に求めた点のみは直ちに否定されるべきではないように思われる。とくに推古三年に高句麗から来日した慧慈が翌年に同寺に住した事実は見逃し難く⁽⁹⁾、同氏も示唆しているように、慧慈と東西堂舎との関連性についてはさらに追及すべきであろう。

なお上代の飛鳥寺が推古の勅願寺ではなく蘇我氏の私寺であったという事実は、すでに戦前に福山敏男氏が論証したとおりで、福山氏は丈六光銘の前半部分や、『書紀』推古十三年条にみえる推古の銅繡二軀の丈六仏発願の記載は、後世に飛鳥寺を勅願寺と偽るための潤色を施した結果にすぎないと主張している⁽¹⁰⁾。実際その論拠として同氏が明示したように、『書紀』天武九年(六八〇)四月条にみえる勅中の「飛鳥寺は司の治に関するべからじ。」「つまり同寺がもともと官司の治める寺院ではないと解される一文が何よりも同寺の性格をよく伝えている。またこれを補強するかのように、皇極三

年(六四四)六月六日に豊浦大臣つまり蘇我蝦夷がひとつの茎にふたつの萼のある蓮を剣池に見いだし、この奇瑞を「是、蘇我臣の榮えむとする瑞なり。」とみて、金墨でこの蓮を描かせて「大法興寺の丈六の仏」に献じたと『書紀』は伝えている。これによって飛鳥寺と本尊飛鳥大仏は先稿で考察したように、蘇我氏の現当二世の安樂に機能する、まさに蘇我氏の信仰の拠り所であった事実がほぼ判明する。それはいうまでもなく蘇我馬子が同寺の願主で、同寺は蘇我氏の私寺であったからにはかならない。事実、『書紀』大化元年(六四五)八月八日条掲載の所謂仏教興隆の詔は「小墾田宮御宇天皇の世に、馬子宿禰、天皇の奉為に丈六の繡像、丈六の銅像を造る。」として、飛鳥大仏と繡仏の願主が馬子であったように記している。いうまでもなく本尊と寺院の願主とは一致するから飛鳥寺は蘇我馬子創建の私寺で、飛鳥大仏に推古をはじめとする蘇我系皇統の現当二世の安寧への祈りが馬子によりこめられたとする先稿⁽¹⁾での私見(後述)は、この詔の記載が裏付けているといえよう。

二、飛鳥大仏の造立過程

それにしても『書紀』が飛鳥大仏の完成年を推古十四年とするのは何故であろうか。すなわち『書紀』には前年の四月一日条に「天

皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔して共に同じく誓願を發して、始めて銅・繡の丈六の仏像各一軀を造る。乃ち鞍作鳥に命じて造仏の工とす。是の時高句麗の大興王、日本国の天皇、仏像を造りたまふと聞きて、黄金三百兩を貢上る。」とあり、これを承けて翌年四月八日条に「銅・繡の丈六の仏像、並びに造り竟る。是の日に丈六の銅像を元興寺の金堂に坐せしむ。」と記載しているのである。かつて福山敏男氏はこの一連の記事が丈六光銘を参照して記されたと推定したうえで、同銘後半部分が推古十六年の隋使来日の翌年に飛鳥大仏が完成したと明記しているのを、『書紀』編者がここにいる翌年を、同銘後半冒頭部分の「十三年歳は乙丑に次れる四月八日戊辰、銅二万三千斤、金七百五十九兩を以て、敬しみて尺迦丈六像、銅繡二軀并に挾侍を造る。」という記載中の、「十三年」の翌年と解しての誤記であるとした¹²⁾。その原因として同氏は丈六光銘の記載中、隋使来日の一文のみは、『書紀』編纂時に別の分類に入って切り抜かれた形となったため、編者が推古十六年の翌年と正しく認識出来ず、これにより同十三年の翌年つまり同十四年の完成と誤ったとみている。しかし以下の理由から、推古十四年完成の記事は『書紀』編者の誤解による錯簡ではなく、『書紀』の飛鳥大仏造立記事が丈六光銘を参照して記されたとする福山氏の見解は目下の通説ながら、再考を要するように思われる。

まず隋使来日のことが別の分類（おそらく外交関係）に入ったと

すると、丈六光銘には使主の裴世清だけではなく、副使として随行した遍光高の名もみえるが、『書紀』推古十六年条の隋使来日記事には副使の名はみえない¹³⁾。切り抜かれたとはいえ隋使の一文が参照されたのであれば、副使の名も『書紀』に記載されて然るべきであろう。このほか丈六光銘と『書紀』の飛鳥大仏造立記事とはかなり類似する記載ではあるが、前者では飛鳥大仏を推古十三年の四月八日に銅二万三千斤、金七百五十九兩をもってつくったとする一方、後者では同年の造立とするものの、日付は四月一日としており、使用した銅と金の量の記載もない。また前者では尊名を「尺迦」とし、加えて「并に挾侍」と記して釈迦三尊像であることを明記するが、後者ではその記載はみえない。さらに前者では高麗の大興王（高句麗の嬰陽王）の黄金の寄贈を「同心結縁」の助成としてその送付年次を記さず、あくまで直後の願文の前提となる一文として記載されているが、後者では天皇への貢物のごとく記載し、貢上の年次を推古十三年としている。しかも贈られた黄金の量も前者では「三百廿兩」とするのに対して、後者では「三百兩」と記載する。

以上のように丈六光銘と『書紀』の飛鳥大仏造立記事とは明らかに一致しない記載が散見されるが、とくに両者の最大の相違点として見逃し得ないのは、前者が飛鳥大仏の作者について一切記さないのに対して、後者では明確に「鞍作鳥に命じて造仏の工とす。」と記す点であろう。この両者の相違を鑑みると、『書紀』の飛鳥大仏

造立記事が丈六光銘を直接参照して成ったとはいかにしても考え難い。ただし前述のように類似する点もみられるから、おそらく『書紀』編者が参照したのは、丈六光銘を参考にして記されたまったく別の文献と推察されるが、その文献を特定する手がかりは先の造立記事に続いて記された、鞍作鳥の功績譚とこれにともなう坂田尼寺創始の記事である。

すなわちその功績譚とは周知のように、鳥が金堂の戸を壊さずに飛鳥大仏を堂内に搬入し得たというエピソードで⁽¹⁴⁾、これに続いて五月五日条には、褒賞として鳥が冠位十二階中の大仁位と近江国坂田郡の水田二十町を授かった旨が語られ、この水田をもって鳥が金剛寺（坂田尼寺）を創始したとの内容を記す⁽¹⁵⁾。福山氏がかかると功績譚ならびに坂田尼寺創始の記事のみは坂田尼寺（以後、坂田寺）の縁起を参照して記したと推定しているが⁽¹⁶⁾、先の飛鳥大仏造立記事の典拠を飛鳥寺の丈六光銘としながら、これと密接に繋がる功績譚及び坂田寺創始記事の典拠のみを坂田寺の縁起に求める同氏の見解にはやや矛盾があるように思われる。むしろ造立記事の前半つまり推古十三年条ですでに「乃ち鞍作鳥に命じて仏を造る工とす。」と明記しているのは、まさに後に続く鳥の功績譚及び坂田寺創始記事の伏線というべきであるから、飛鳥大仏造立記事と、あとの功績譚及び坂田寺創始記事はいずれも坂田寺縁起を典拠としていえると考えほうが自然であろう。おそらく『書紀』編者は記念すべ

きわが国最初の丈六金銅仏造像の記事を本家本元の飛鳥寺の縁起に依らず、むしろこの偉業を成し遂げた人物つまり鳥のほうに史的重要性を認めたため、鞍作氏ゆかりの坂田寺縁起の内容に依拠して記したと推察される。したがって『書紀』が記す推古十四年完成は丈六光銘を誤解したためではなく、もともと坂田寺縁起がそのように記していたのであり、『書紀』編者がこれを鵜呑みにした結果ではあるまいか。その場合、想定される事情は以下のとおりである。

鳥作の飛鳥大仏を本尊とする飛鳥寺と、鳥が創始した坂田寺とはまさに同胞というべき寺院で、坂田寺縁起を後代に編む際、飛鳥寺の丈六光銘（前半部分・後半部分とも）を参考にした可能性は高い。よって丈六光銘の前半部分が飛鳥寺を推古発願寺院と偽っているため坂田寺縁起もこれを踏襲、さらに『書紀』の飛鳥大仏造記事に継承されたとみられる。しかし坂田寺縁起では丈六光銘の記載どおり飛鳥大仏の完成年を推古十七年とはせず、意図的に推古十四年の完成としたと私は考えている。というのもおそらく推古十四年は坂田寺にとって何らかの重要な年であったからで、かつ鳥が実際に坂田寺の根本願主であって、同寺の創立自体が鳥自身の手になる飛鳥大仏と密接に関連していたためと推察される。

そこで坂田寺縁起に記されていたであろう鳥の坂田寺草創譚すなわち『書紀』推古十四年五月五日条に注目すると、前述のように彼は推古から大仁位と水田を下賜されて坂田寺を創建したように記載

されている。しかもこの褒賞の理由として、祖父である司馬達等が推古へ仏舍利を献上した事績、姨の嶋女が尼僧となり諸尼の導者となった事績、飛鳥大仏造立に際し、推古の求めに応じて鳥が仏の本を献上したうえ、無事に飛鳥寺の金堂に搬入した事績などを推古が勅として褒め讃えるように列記されてもいる。しかし達等の仏舍利献上のことや嶋女の出家についてはすでに先稿で注目したように、推古ではなく馬子への奉仕であることを敏達紀が明記しており⁽¹⁷⁾、また仏の本も実際には飛鳥大仏の願主たる馬子への献上であったとみてよい。それゆえ推古十四年五月五日に馬子の推挙で鳥が大仁位に叙され、馬子から近江国坂田郡の水田を拝領したため、これを契機に坂田寺を発願あるいは起工したというのが史実としての坂田寺の始まりであろう⁽¹⁸⁾。

よって坂田寺の創始は鳥の飛鳥大仏完成の功績にもとづくことになるが、そうすると丈六光銘の推古十七年完成という史実との齟齬が生じてしまう。しかしこの年の完成を待たずとも、飛鳥大仏の造頭が著しく進展し、推古十四年の時点ではほぼ完成に近づいていたのであれば、造像途上であっても馬子が鳥の功績を勞うべく、大仁位と水田を賞として下賜することはおおいにありえよう。そこで重要となるのは丈六光銘後半部分の冒頭、つまり前年の「十三年歳は乙丑に次れる四月八日戊辰、(中略)敬しみて尺迦丈六像、銅鑄二軀并に挾侍を造る。」にいう「造る」をいかに解釈するかである。

これについては鑄造の完了とみる説⁽¹⁹⁾と、鑄造の開始とみる説⁽²⁰⁾があるが、あえて四月八日つまり仏誕の日を期して「造る」とある点を重視すると、前者の説では飛鳥大仏の鑄造成功を祝して仏生会の日に、すでに鑄造が完了していた飛鳥大仏を供養する法会を催した可能性が推定される一方、後者に従えば鑄造前の原型の完成を祝う供養会が設けられたとも推定し得る。いずれが妥当か難しい問題ではあるが、町田氏がいうように、後代の山田寺の丈六金銅仏(興福寺伝来の旧山田寺仏頭)でさえ、天武七年(六七八)の鑄造開始から同十四年の開眼まで、じつに七年もの歳月を要しているから⁽²¹⁾、推古十三年を鑄造開始年とすると鑄造よりわずか五年で完成したことになり、やや現実にはそぐわないであろう。むしろ丈六光銘が先の一文の直後に高句麗の大興王による黄金助成の旨を記す点に着目すると、あるいは飛鳥大仏は推古十三年の時点ですでに鑄造済みで、四月八日の仏生会での供養の直後には早くも仕上げの鍍金作業へ進んだのではあるまいか。

以上のように推定したうえで、本像の制作開始年次を塔完成の推古四年に求める藤澤一夫氏の見解⁽²²⁾に照らすと、推古十三年の鍍金開始は最初の丈六金銅仏にしてはかなりスムーズかつ現実的な造像の流れといえるであろう。そうすると推古十四年に鳥が賞を得た時点で、鍍金の作業も半ば近くにまで進んでいた可能性が推定される。したがって完成は目前であり、そのため願主の馬子による鳥へ

の労いの意味で大仁位と水田を授与したのであろう。これに応じて鳥は坂田寺を創始したと推定される。しかし後世の坂田寺縁起の筆者は同寺の根本願主である鳥の功績を一層劇的なものと発展させるべく、飛鳥大仏の完成をあえて推古十四年のこととし、そのうえで例の金堂奉安の功績譚を創作したのではあるまいか。飛鳥大仏は縁起筆者からすれば他寺の本尊であるため、とくに正確な完成年に固執する必要はなく、むしろ飛鳥大仏の完成という鳥の生涯最大ともいうべき偉業による同寺の創始を縁起中で大々的に語ることがのほうが重要であったと私考される。

ところで推古十三年に鍍金が開始されたとすると、これより数年前に鑄造作業を終えたはずで、鑄造後の鑄掛や鑄浚い、研磨などの工程も同年にはすでに完了していなければならない。その意味では『書紀』が同年に大興王の黄金献上があったことを記す点は示唆的で、これも坂田寺縁起に依った結果と推定されるが、しかし『書紀』にはこの年に高句麗から使者や僧侶が来日したとの記事はみられないから、大興王からの黄金がこの年に齎されたとは考え難い。ちなみに福山氏は丈六光銘中、黄金助成のあとにみえる隋使来日の箇所すなわち「歲次戊辰大隋国使主鴻臚寺掌客裴世清、使副尚書祠部主事遍光高等来奉之。」の「奉之」を黄金の献上と解して、推古十六年に隋使が高句麗の大興王から黄金を託され、これを倭国に献上したと解している⁽²³⁾。だがこの箇所については大橋一章氏が「奉

之」の「奉」は「奉^{あが}める」つまり礼拝するという意で、この一文は来日した隋使が飛鳥大仏を奉拝したと解すべきとの明確な見解を示して福山説に疑義を呈した⁽²⁴⁾。確かに大橋氏もいうように、隋使が敵国たる高句麗の国王からの黄金を託されるとはいかにしても考え難いから、推古十六年に黄金が齎されたとのみかたは成立しない。

そこで推古紀を数年遡ってみると、同十年潤十月十五日条に高句麗僧の僧隆と雲聡が来日したとある点が注目される⁽²⁵⁾。私考するに、あるいは大興王はこの二僧に黄金を託してわが国に贈ったのではなからうか。想像を逞しくすると、大興王は慧慈からの情報により、飛鳥大仏造立の進展状況をつぶさに知り得ていたのかもしれないが、同心結縁する側の大興王にしてみれば、仏教後進国であった倭国が初めて制作する金銅製の丈六仏であるため、当初は実現が可能か否か確証を得なかったに違いない。しかしもし推古十年が黄金寄進の年であったならば、この頃には飛鳥大仏の制作がかなり進展し、完成がほぼ確実視されていたとみることも可能である。こうした丈六金銅仏制作の最大の難関はいうまでもなく鑄造であるから、あるいは推古十年頃には鑄造の工程がかなり軌道に乗っていたため、その情報を得た大興王が満を持して結縁のための黄金を僧隆らに託して布施したのであろう。このことから大興王にとっても飛鳥大仏は自身の祈りの対象で、のちに述べるように黄金を施入することと自らと国土の安寧ならびに死後の救済と成道などを祈願したと

考えられる。

以上の造立過程を纏めると、飛鳥大仏は推古四年頃に制作を開始、推古十年には鑄造の工程が進展して大興王から黄金の布施があり、同十三年の三月頃まで鑄造後の鑄掛などの作業を継続、やがて四月八日の供養会の直後に鍍金の作業へと進んだのではなかろうか。こうしてその翌年に鳥が造像の功により坂田寺を創始、鍍金の工程がほぼ完了したであろう同十六年に隋使の奉拝があり、同十七年の金堂（中金堂）の竣工にともない大光背裏面に銘文を鏤刻のうえ堂内に奉安したと推定される。

三、飛鳥寺伽藍の機能

高句麗からの黄金施人は飛鳥大仏が施主である大興王の祈願対象ともなったことを意味するが、これにより飛鳥寺伽藍は高句麗王の祈願寺的性格を帯びたと私考される。それゆえ慧慈の止住と併せ考えると、同寺と高句麗との密接な関係から、その特異な伽藍配置の先蹤を清岩里廢寺や上五里廢寺、定陵寺（陵寺）址、土城里廢寺などの高句麗寺院のそれに求めようとするかつてのみかた²⁶は依然有力であろう。とりわけ注目されるのは「東金堂」「西金堂」と一般に呼称される東西堂舎が板石を並べた二重基壇上に建てられていた点で、これが清岩里廢寺の東西堂舎の場合と共通するという先学

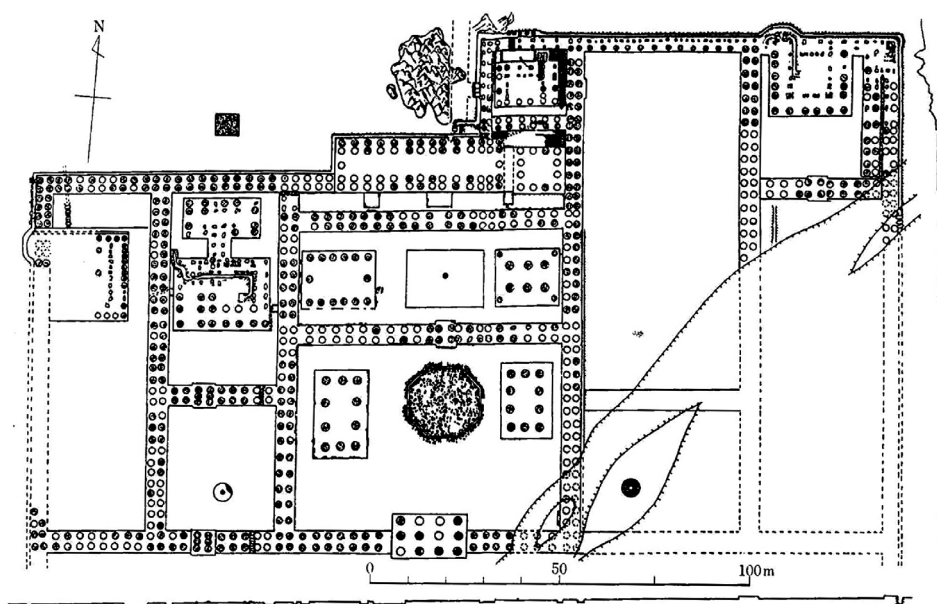


図2 定陵寺址伽藍配置図〈小泉頭夫『古代朝鮮遺跡の遍歴』六興出版より引用〉

の指摘⁽²⁷⁾は重要である。

ただし高句麗伽藍との共通点は東西堂舎のみで、飛鳥寺伽藍を構成するほとんどが百済寺院のそれと共通するという事実は、出土した素弁蓮華文軒丸瓦のデザイン、扶余・王興寺などと同様の方形の仏塔及び地下式心礎、埋納品などがこれを如実に物語っており⁽²⁸⁾、いみじくも塔露盤銘が記す百済の技術者の指導で成ったことを証明している⁽²⁹⁾。おそらく塔などの建築様式もその細部まで百済様式を踏襲していたに相違ない。それゆえに根本的な争点は、東西堂舎が高句麗式か百済式か、という点に尽きるが、近年では東西堂舎の祖形を王興寺などの回廊に取り付く南北に長い一對の建物に求める説⁽³⁰⁾、あるいは回廊外の東西別区画の建物に求める説⁽³¹⁾が提出されている。ようするに東西堂舎も百済寺院内の施設の流れを汲むとみるわけであるが、しかしいずれも回廊内の建物に注目した説ではなく、かつ後者にいたっては中枢伽藍の東西に造営された別院というべき区画で、飛鳥寺の東西堂舎には結び付かない。もし百済寺院に祖形を求めるのであれば、飛鳥寺のごとく回廊内の塔の東西に配された建物を見いだす必要がある。だがいまのところ百済の寺院址の発掘でこれに該当する建物は検出されず、かえって高句麗寺院に同様の例を求め得るため、やはり飛鳥寺の東西堂舎は高句麗のそれに倣ったとみるべきではなからうか。

そもそも飛鳥時代の寺院で東西堂舎を有する伽藍例が飛鳥寺のみ

に限られる理由は、飛鳥寺こそが当代で唯一高句麗王の寄進を受けた寺院であったからであろう。それだけに八角形を呈するとはいえ、高句麗寺院の仏塔に東西堂舎が取り付く点は重要で⁽³²⁾、とりわけ定陵寺址の事例(図2)はこれら東西堂舎の本質を教えてくれる最良の伽藍モデルといえる。

定陵寺址は平壤市に所在する真波里古墳群中の長寿王陵と推定される古墳(伝東明王陵)の陵寺で、四九一年以後創建の文字通りの「陵寺」の遺跡とみられているが⁽³³⁾、同寺の伽藍はほかの高句麗寺院とは異なり、八角塔の北に位置する仏殿(金堂)と八角塔との間を東西に横切る回廊が敷設されている。そうするとこの回廊が文字通り一線を画して、北側の金堂エリアと南側の塔エリアとを形成しているものであり、光森正士氏はこの伽藍の特徴から北側を金堂院、南側を塔院と判じたが⁽³⁴⁾、まさにその通りであろう。ちなみに八角塔についてはこれを仏塔とみなさない意見もあるが、定陵寺伽藍を構成する多くの建物の中、八角形のものがこれが唯一で、ほかは堂舎と思しき矩形の建物群であり、よって八角形の建物は仏塔か、塔と同様に仏舍利を祀る建物と推定される。というのも当時の東アジアにおける舍利信仰の隆盛から、寺院は仏舍利を奉安して祀る場で、仏塔なき寺院はほぼあり得ないからである。それゆえ同寺で唯一八角形を呈した建物も仏塔とみて差し支えなく、これを中心とする南側のエリアは光森氏のいう塔院に違いない。

そうするというまでもなく塔院の中心は八角塔であるため、両翼をなす東西堂舎は金堂の格ではなくあくまで塔の付属建物で⁽³⁵⁾、光森氏はこれらを塔礼拜のための礼堂と推定している。果たして礼堂に同定可能かどうか不明ながら、これらが塔の付属建物であることは間違いなく、よってほかの高句麗寺院の東西堂舎や、これらに先例を求める飛鳥寺の東西堂舎も塔の付属建物として建立されたのであろう。しかもこれらが塔に付属するだけに舍利信仰に関連する堂舎であることは想像に難くない。先稿で私は弥勒信仰と舍利信仰との密接な関係について考察したが、東西堂舎のうち東堂に鹿深臣将来の弥勒石像が奉安されたこともその意味では示唆的である。

そもそも馬子の最初の師が高句麗僧の恵便であっただけに、発願時の当初のプランのなかにすでに高句麗式を一部採り入れて東西堂舎を設けることが決定していた可能性もあり得る。しかし造営途上で急遽追加建立された可能性も捨てきれない。むろん一旦伽藍が完成した後に高句麗式の官寺に改変したとする先のベルチェ氏の説には左袒し難いが、長期の造営過程のなかで、当初の伽藍プランを途上で変更して塔の付属堂舎が増設されたとしても不思議ではない。おそらく推古四年に塔が竣工した時点では王興寺に近い百濟式伽藍での完成が予定されていたはずで、当初東西堂舎を設ける計画がなかったことは、同氏がいうように塔の基壇に取り付く階段が南北にのみ存在していたとの発掘調査時の所見⁽³⁶⁾が示唆している。ある

いは『書紀』崇峻五年条が「大法興寺の仏堂と歩廊とを建つ。」と記すのは、このときに百濟式伽藍配置の将来プランが正式決定したことを意味するのかもしれない。

ともあれ塔完成の推古四年にその露盤に鏤刻した銘文とされる『元興寺縁起』所引の塔露盤銘の後半部分には、戊申年（崇峻元年〈五八八〉）に百濟の昌王（威徳王）が遣上したという僧侶や技術指導者等の名を列記しているから、後述のごとく百濟王とその国土人民の安寧と来世の安楽を竣工した塔に祈願したのであろう。つまりこの時点では寺院造営を可能にする人材を倭国に施した昌王の善行に應える意味で、同寺は百濟王の祈願寺的性格を有していたと推察される。しかし同年に高句麗僧の慧慈が止住、さらに推古十年に今度は大興王が鍍金のための黄金を施入してきたことから、願主の馬子は高句麗王の善行にも対応する必要に迫られたはずである。そこで百濟式伽藍配置で完成する予定であったところを、急遽高句麗寺院の形式を一部取り入れて塔の付属堂舎を増設することで、高句麗王の祈願寺としての性格と機能を飛鳥寺に付与したのであろう。おそらく東西付属堂舎の建立は慧慈の指導に依るところが大きかったと推察される。こうして飛鳥寺は百濟王と高句麗王、さらにはそれぞれの国土と人民のための祈願寺としての機能を併せ持つことになったと私考されるのである。

四、東アジアにおける飛鳥大仏

飛鳥寺の造営途上で東西堂舎が追加増設された年次は不明だが、推察するに大興王が黄金を施入した推古十年以後の計画変更とみられるから、同年から金堂が完成して飛鳥大仏が安置される同十七年までに増設のプランが決定したのであろう。いずれにしても飛鳥寺の造営事業が百済の技術指導者派遣と高句麗の黄金寄進によって成就したのはまぎれもない事実であるから、同寺の伽藍には百済王と高句麗王のための祈願寺的機能が具わっていたと私考される。よって伽藍の核ともいへべき本尊の飛鳥大仏にも同様の役割が期待された可能性が高い。そこであらためて先稿で考察した飛鳥大仏の機能について以下に要約再説しておきたい。

過去仏のための建塔と造仏の功德は『法華経』方便品が説くところで、これらの善行の実践により仏になれる（覺りに到達出来る）と説明しており、さらに莊嚴王本事品は自身が身に着けている装身具を仏に施して供養する善行を説く。そこで注目すべきは飛鳥寺の塔心礎の仏舍利及び供養品の埋納方法が梁武帝の長干寺建塔や威徳王の王興寺建塔の事例の流れを汲むとみられる点で、心礎からの出土遺物である勾玉やガラス玉、挂甲、馬具などは莊嚴王本事品の経説にもとづく埋納と推察される。それゆえ従来はこれらを古墳祭祀の伝統にもとづく祖霊あるいは祖先神への捧げ物と解することが

一般的であったが、馬子の仏教理解はこのような土俗信仰に根ざした理解ではなく、大陸の舍利信仰などを純然として享受したものであった。したがって飛鳥寺の建塔は『法華経』の経説に依拠した善行と私考され、馬子は身に着けていた品々を心礎に埋納して仏（仏舍利）を供養し、その善行による利益を期待したと推察される。そうすると建塔と同等の作善的意義をもつ飛鳥大仏の造立も同様で、造像によって仏を供養し祈願することで、今度は供養を受けた仏が馬子に应えて彼の願いを叶えるという、まさに仏と祈る者（衆生）との相互システムが「この福力により登遐せる諸皇と遍及の含識、信心有りて絶へせず、面（まのあたり）に諸仏を奉ぎて共に菩提の岸に登り、速やかに正覚を成さむことを」という丈六光銘の願文から明確となる。ここに記された「登遐せる諸皇」をすでに世を去った倭国の諸王、また「遍及の含識」を馬子自身を含む、現在過去のあらゆる衆生とみるならば、過去と現在に満ちているあらゆる有情の、来世での浄土往生とそののちの正覚を馬子が祈願していると解されよう。したがって飛鳥大仏は過去の倭王、願主の馬子をはじめ、過去と現在のすべての衆生を救済するという役割を期待して制作された結論付けられる。むろん当時在位していた推古天皇や聖徳太子ら蘇我系の皇族たちも「遍及の含識」に含まれるから、馬子にとっての政治的權威の源たる蘇我系の王権（欽明天皇系の皇統）の安寧を馬子が飛鳥大仏に祈った可能性もおおいにあり得る。

以上のような先稿での私見に加えて本章で明らかにしておきたいのは、願主が仏を供養することで亡者追善や自己の浄土往生などの祈りが仏により実現されるという、先稿で提示した私見の確からしさである。じつは長岡龍作氏の研究³⁷⁾に導かれて提示したこのメカニズムは時代こそや降るが、『日本霊異記』の奈良時代の説話がいみじくも証明している。すなわち同書巻下の第四縁及び十三縁の説話には、願主の仏への供養を因とする他者救済のことが明記されているのである。

まず第四縁には殺意を抱いたある男が舅の僧を海に投げ込んだあと、わざと偽装の斎会を設け、舅の追善と称して精進の食を三宝に供する場面が語られているが、ここで重要なのは仏をはじめとする三宝に食を供養して死者の浄土往生を祈っている点である。この場合、斎会は悪しき男の偽装工作ではあるものの、この説話は上代において死者の追善のために仏に供物を捧げ、仏により死者が救済されることを祈願していた奈良時代の信仰的実態を如実に示唆している点で重要といえよう。

また第十三縁は鉄掘りの人夫が山崩れで遭難する話で、人夫の妻と子はすでに彼が世にないと思い、観音像の図画と写経でもって七七日にわたる観音への供養を施し、彼の冥福を祈願するくだりがとくに注目される。まさにこれこそ亡き者の追善のために観音を造像しこれを供養する好例といえよう。事実、この説話では後日譚と

して、ひとりの沙弥に化した観音が、遭難して山中に閉じ込められていた人夫のもとにあらわれて告げて言うのに、「汝の妻子は我に（観音のこと）飲食を供し、吾れを雇ひて救ふことを勧（あつら）ふ。（後略）」と記して、妻子が自身（沙弥つまり観音）に水と食事を供養して、亡きものと思い込んでいた人夫の冥福（浄土往生）を祈願したおこないを褒め讃えており、畢竟、観音の功德で無事に山中から救われる内容が明記されているのである。この妻子の観音供養の内容は上代の追善供養の仕組みを先の第四縁よりも明確に説明しており、先稿で提示した先の私見に合致する。つまり観音造像と像への飲食供養は、ひとえに願主たる妻子が観音に夫の浄土往生を祈ってのおこないであり、これに観音が応えて人夫を浄土へと導くどころか、彼を生きて妻子のもとへ帰したのである³⁸⁾。

こうした説話が奈良時代の民衆の仏教信仰の実態を知り得る史料であることはいうまでもなく、これによって当時、死者追善の造像供養が仏や菩薩へ向けられた善行（因）で、その果として仏菩薩からの救済が約束されるというありかたが定着していた事実が判明する。そもそも上代の仏教信仰はあたかも一石を投じて水面に生じた波紋が周辺に次第に広がってゆくように、最初期の蘇我氏から周辺の諸豪族さらには天皇家へと漸次広まり、やがて律令体制下で庶民層にまで波及したとみて大過ないであろう。そうするとこのような追善をテーマとする仏供養（造像供養）のシステムも、わが国では

蘇我氏の信仰を始原として、のちの奈良時代にはこれが民間にも定着していたと推察されるが、前掲の説話はこの推定を明確に裏付けている。したがって蘇我馬子の飛鳥大仏にみられる追善造像も、先稿で述べたように釈迦仏への造像供養によって釈迦仏からの救済を期待した作善行であったとみてよいであろう。

ただし先稿で私は釈迦仏から救済される対象は王族をはじめ、馬子を含む倭国内の人々に限定されるように、つまり倭国という限られたエリア内での救済祈願に終始したかのように説いた。しかし本稿ですでに考察したように、飛鳥寺が造寺造仏のための作善行を実践した百済王と高句麗王の祈願的性格を帯びた寺院であったとすると、両国の人々をも救済対象として包摂していた可能性がきわめて高い。確かに両国王による技術者と黄金の提供は、世俗的な見地では単なる飛鳥寺完成のための支援に過ぎないが、先の私見に当て嵌めるとまさに仏（釈迦）を供養する作善（喜捨）にほかならず、前述のごとく塔露盤銘に百済の昌王（威徳王）による技術指導者の派遣を、また丈六光銘に高句麗の大興王（嬰陽王）の黄金喜捨のことを詳細に記す点はこれを明確に示唆している。つまり塔と本尊のそれぞれの銘文中でふたりの王の作善行を顕彰して、百済と高句麗の安寧を祈願したのである。銘文にこのような特定の人名と善行を鏤刻すること自体に、その善行者の果報を仏に祈るという意味がこめられているとみてよい。とくに後者では大興王による黄金喜捨の

同心結縁に続いて、「この福力により」と記して先述の願文が続くわけであるから、願文が被救済対象としている「遍及の含識」のうちには、当然ながら大興王とその国土及び人民も含まれているとみるべきである。

むろん高句麗だけではなく、丈六光銘にはその文言こそみえないものの、先の塔露盤銘の記載を手がかりにすると、助力を惜しまなかった昌王と百済の人民すべても含むであろう。とくに飛鳥寺に慧慈と慧聡が住したという事実以上の私見を補強するように思われる。というのも慧慈・慧聡の来日が高句麗及び百済の朝廷からの公的な派遣であったか、私的な渡来であったかは不明ながら、飛鳥寺で実修された仏会において、この二僧がそれぞれの母国や君主の現当二世にわたる安寧を祈願するのは至極当然と推察されるからである。

以上の検討から、飛鳥大仏に期待された救済の機能は、先稿で述べたような偏狭な倭国の範囲に留まるものではなかったであろう。そこで先稿での私見を補足修正するならば、広く百済と高句麗の人々の安寧をも祈願対象として受け入れていた可能性がきわめて高く、東アジアレベルでの救済機能がこのわが国初の大興王の丈六金銅仏にこめられたと私考されるのである。あるいは完成期である推古十六年に隋の使者がこの像を礼拝した時点では、隋とその皇帝へも祈願の目が向けられたかもしれない。よって飛鳥大仏にはわが国だけに留まらない、国際的視野にたつ衆生救済の機能が求められたのでは

なからうか。そうすると願文の「遍及の含識」つまり仏教が説く大無辺の世界に遍満する衆生という文言はきわめて意味深長といわねばならない。まさに丈六光銘の願文は、願主である馬子が国際的な視野に立ってこの像を発願したこと、さらにはこの像に託した願いが、倭国をはるかに超越した、「遍及」というに相応しい、広大な東アジア世界を対象としていた事実を垣間見させてくれるのである。よって飛鳥大仏は本邦最初の丈六本尊ながら、早くも国際的な役割を担った金銅仏として完成をみたのであろう。

五、飛鳥大仏と百済・高句麗の仏像

飛鳥寺伽藍を百済式と高句麗式の折衷とみた第三章での私見に照らすと、本尊の飛鳥大仏にも双方の様式が反映された可能性は十分に考え得る。この点、本像を含む止利派の仏像様式に百済様と高句麗様の影響を想定した毛利久氏の論は興味深い⁽³⁹⁾。ただし本像については先述のごとく、髪際から両目を含む面部上面、左耳、右手の指の一部のわずかな箇所以外は建久七年（一一九六）の同寺の罹災による激しい焼損後の拙い補鑄とする所見⁽⁴⁰⁾が定着しているため、当初の造形にかなり忠実に補修されたとするみかたが一般的であった。そうしたところ平成二十四年及び翌年に試みられた蛍光エックス線分析調査により、体部など従来後補とみなされてきた

箇所もそのほとんどが当初の形状を伝えているとの調査結果が櫻庭裕介氏によって報告されたのである⁽⁴¹⁾。この新知見には驚きを禁じ得なかったが、その後同二十七年から翌年にかけて藤岡穰氏らによって同様の再調査が実施された結果、藤岡氏は頬や顎を含む面部の大部分、肉髻の大半、地髪部の正面下部及び一部の螺旋、右手（従来より当初とされてきた第二、三、四指に加えて、掌の一部、第一指と第二指の間の縷網相、第五指の基節）は当初であるのに対し、体部については当初部との造形の相違から罹災後の補鑄であると断じた⁽⁴²⁾。かかる数回の調査により最も重要な面部のほぼ全ての残存が判明したことは僥倖だが、体部については問題を残しており、櫻庭氏の残存説と藤岡氏の後補説のいずれが妥当か、調査参加者でもなくかつ科学的な精査や鑄造技法に疎い私には明確にする自信はない。

ただ素朴な推定ながら、建久の罹災に際して大光背と付属の脇侍像が火災の熱で完全に溶解したのであれば、大光背に接する本像の背面もひとたまりもなかったに違いない。よって鑄張が目立つ背面部分はやはり焼損後の修復ではあるまいか。一方、面部をほぼ無事とみる調査結果を重視すると、正面からの火勢は像の背後ほどではなかったとも推定されよう。そうすると体部の正面部分もわずかに表面の焼損のみで残存したか、後補であるとしても全て溶解したのではなく、残存部に鑄加えを施す程度の作業で事足りた可能性はな

いであろうか。

ちなみに罹災直後の本像の状況を記した『上宮太子拾遺記』は頭部と手のみが残ったように記すが⁽⁴³⁾、大橋一章氏によるとこの記載はあくまで頭部と手が焼損を免れたことを語るもので、体部が完全に溶解したとは解釈出来ないという、併せて鑄造の専門家の言を紹介している⁽⁴⁴⁾。その言によると頭部と手などのごくわずかな部分を継ぎ足しての体部の補鑄は不可能であるらしく、これについては再び旧山田寺仏頭の事例が参考になる。文治三年（一一八七）に興福寺東金堂へ移されたこの丈六金銅仏は応永十八年（一四一一）の罹災で頭部のみが残ったが、同二十二年の東金堂再興の際に体部を再鑄する修理を施さず、別の新本尊（今日の東金堂本尊薬師像）が制作されている。おそらくその理由は体部の溶解が甚だしいため、巨大な丈六像だけに頭部を鑄継いでの補鑄が困難だったためであろう。よって飛鳥大仏の場合も体部が全て溶解していたのであれば今日頭部のみが残るはずであるが、体部の現存を鑑みると面部と同様に建久の罹災時、像正面からの火熱が弱く幸いにも残存したか、あるいは部分的に焼損あるいは溶解しても、臍気ながら当初の着衣や衣文線の痕跡が残ったためこれを手がかりに、溶解した大光背等の銅を再利用して表面的な鑄加えが忠実になされたのではなからうか⁽⁴⁵⁾。むろん丈六光銘の「坐・於元興寺」の記載から、当初より坐像であったことは間違いない。かつて久野健氏は本像の胸元に

みられる内衣のV字状の合わせ目が百済時代の忠清南道・瑞山磨崖三尊の中尊にも看取され、衲衣の着衣表現も中国南北朝時代末の作例のそれに一致することを指摘したが⁽⁴⁶⁾、こうした久野氏の所見を承けた大西修也氏も本像の足組みの類例を全羅南道・蓮洞里に伝わる百済時代の石仏に求めている⁽⁴⁷⁾。このように先学が体部の造形に当初の面影を見いだしている点はいかにしても等閑視し難く、オリジナルのままとすれば当然のこと、また後鑄であるにしても体部正面はかなり当初の造形を伝えているのではあるまいか。

とりわけ時代がやや降る統一新羅代の作例でかつ小像ではあるが、慶州・皇福寺塔址出土金製如来坐像の体部のおおまかな表現が飛鳥大仏のそれに近く、三国時代の仏像の古い着衣形式を継承する点は留意される。すなわちこうした着衣形式は元来、胸元を開いて内衣と裙の結び目をあらわにしたいいわゆる中国式通肩で、衲衣の末端を腹部から左肩へとはねかけて左腕まで覆う。だが鳥がこれより十三年後に制作した法隆寺金堂釈迦三尊像（以後、法隆寺像）の中尊では同様の形式を踏襲しつつも、重要な体部正面にはこれよりも古い所謂褒衣博带式の通肩を採用し、結果双方の形式を折衷したところが水野敬三郎氏の研究⁽⁴⁸⁾で判明している。鳥が採用したこの二種類の形式の共通点とともに胸元を大きくU字形に開いて内衣と裙の結び目を表わす点にあるが、後者の形式は前者のように衲衣の末端を左肩にはねかけるのではなく、左前膊部にかけて終わる点の特



図4 銅造如來立像〈延嘉7年銘〉韓国・国立中央博物館蔵

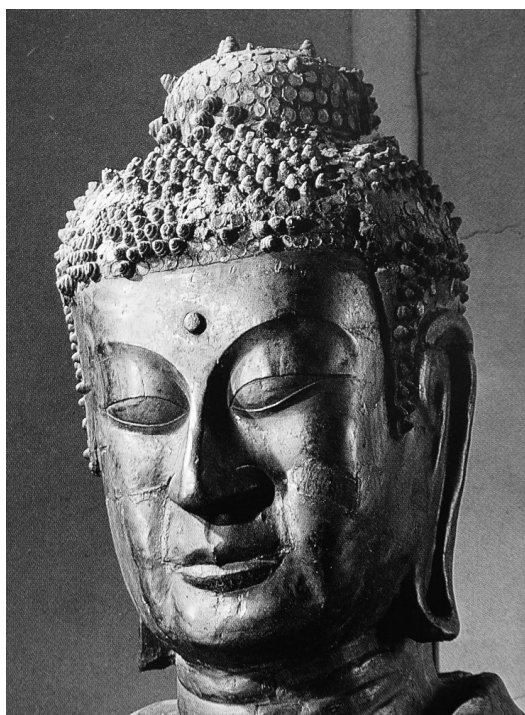


図3 銅造釈迦如來坐像（飛鳥大仏）奈良・安居院

徴で、南齊や梁、北魏、東西魏で広く流布したことは周知のとおりである。

いま松田誠一郎氏の区分名称⁽⁴⁹⁾に従って本稿でも後者を旧形式、一方、南北朝末期頃に流行し、飛鳥大仏にも継承された前者を新形式と呼ぶこととするが、百済の現存作例では新形式の如來像が目立つ。例えば扶余・佳塔里出土の銅造如來立像及び百済仏とされる法隆寺獻納宝物第一四三号仏三尊像中尊をはじめ、南朝の作例とも推定される山形・大日坊銅造如來立像、軍守里廢寺出土の蠟石製如來坐像、瑞山磨崖三尊中尊、泰安磨崖仏の如來立像二軀などが新形式を採用した作例で、よって百済では新形式の像がかなり流布したらしく、飛鳥大仏がこうした百済仏を模範に新形式を踏襲して制作されたことは、前述の先行研究や百済色が濃厚な飛鳥寺の特質からみても間違いないであろう⁽⁵⁰⁾。

だがこれら一連の百済仏の面貌はおしなべて笑みをたたえた慈悲相で丸顔を呈する一方、飛鳥大仏のそれは面長で、吊り上がった杏仁形の両目が本像の森厳で奇異な面差しに寄与している（図3）。この点は百済仏との大きな相違で、本像のように着衣法が新形式でかつ鑄立った厳しい面貌の作例は南朝や北朝の仏像には確認されるが、朝鮮三国期の作例中に見いだすのは意外に難しく、新形式の像はおおよそ温顔につくられている。ただし面長で両目を吊り上げた厳しい表情の作例については、延嘉七年（己未年・五三九）銘の



図5 石造如来立像〈山東省・龍興寺址出土〉青州市博物館蔵

銅造如来立像(図4)をはじめ、国立中央博物館所蔵の銅造菩薩立像、同半跏思惟像など、高句麗の作例にみられる点が注目されよう。とくに延嘉七年銘像を着衣が旧形式を示す点で飛鳥大仏とは異なるが、同じ螺髪や頭髪や面貌に本像と通じる趣が確認されるのは重要で、おそらく高句麗では百済と異なり、目が吊り上がり気味の厳しい表情を示す作例のほうが流行したのではなからうか。よって延嘉七年銘像のような高句麗仏を馬子の師の恵便が将来したか、あるいは上原和氏が推定するように慧慈らが来日時に将来した可能性はきわめて高く⁽⁵¹⁾、鳥は本像の原形制作に際してこれらを参照のうえ、全体的には百済様を踏襲しつつも、面部は森厳な高句麗様を

採用して両者を折衷したと私考される。というのも鳥の二種の異形式折衷による創意は前述のごとく、後年の法隆寺像でも着衣表現において実際に試みているからである。

なお本像で参照された両様式の源流については南朝、とくに梁に求め得る。梁の作例については従来より知られていた成都での造像例に加えて、近年藤岡穰氏によって建康での造像例が纏まって紹介されているが⁽⁵²⁾、これら梁代の仏像中には、中大同三年(五四八)銘の石造観世音菩薩及び眷属像の中尊のような百済仏に通じる慈悲相の作例と、上海博物館所蔵の銅造如来立像やベトナム・アンザン省博物館所蔵のオケオ遺跡出土の銅造如来立像のような高句麗仏に通じる吊り上がった目をもつ鋭い眼差しの作例が混在する。おそらくともに朝鮮半島に伝播したもの、おもに百済では前者が、高句麗では後者が流行したのではなからうか。高句麗が南朝との交流のなかでその様式を受容した可能性については毛利久氏や吉村怜氏、大西修也氏らが説くところで⁽⁵³⁾、また吉村氏や藤岡氏は南朝の造像が北の山東地域に及んだ可能性を高めており⁽⁵⁴⁾、さらに山東地域から朝鮮半島への伝播も大西氏や岡田健氏により解明されている⁽⁵⁵⁾。

このような先学の見解に導かれるならば、山東地域での造像として見逃し難い青州・龍興寺址出土の、北魏末から東魏の石仏群中に吊り上がった目の作例が多く含まれるのは特筆すべきであろう。と

くにそのうちの如来立像(図5)の面貌は、両目が典型的な杏仁形を呈するために飛鳥大仏の面貌に通じるとともに、頭髮を螺髪形とする点でも共通する。私考するに、こうした作例はおそらく南朝の影響によるもので、さらに山東から高句麗へと伝播して延嘉七年銘像などが制作され、同様の面貌表現の仏像を恵便や慧慈らがわが国に齎したのではあるまいか。そうすると藤岡氏が推定するように飛鳥大仏の頭部の表現は梁の仏像にその源流が求められるとともに⁽⁵⁶⁾、これを飛鳥寺伽藍に援用すると、第三章で取り上げた高句麗寺院特有の塔付属の東西堂舎も中国での発掘例は検出されないが、嚆矢は梁の堂舎にあるのかもしれない。よって同寺の伽藍配置は繰り返すように一塔三金堂形式とは呼称し難いものの、源流を南朝の伽藍に求める大橋一章氏の推定⁽⁵⁷⁾も首肯されよう。

以上、飛鳥大仏のような森厳な面貌に新形式の着衣法を呈した作例が古代朝鮮仏に見いだし難い点から、本像の造形に鳥による百済様と高句麗様との折衷を想定してみた⁽⁵⁸⁾。この想定に照らすならば、本章の冒頭で紹介した毛利久氏の見解はおそらく妥当であろう。むろん百済、高句麗共に現存例がごく限られるため、これを証明するにやや困難を伴うが、一仮説として両者の折衷があったとすれば、それは鳥の創意というよりも、願主の馬子の要請に鳥が応えた結果とみるべきである。すなわち先の『書紀』推古十四年五月五日条では推古が鳥による「仏の本」を献上に対して「朕が心に

合っ」たと褒め讃えているが、前述のように実際には馬子への献上で、百済仏に倣いつつも仏像で最も重要な面部に高句麗仏のそれを反映させることを馬子が所望したのであろう。「仏の本」の記事はこれに鳥がみごとに応えた事実をもとにしていると私考される。

むろん馬子が高句麗仏に拘ったのはわが国に将来されていた渡来仏のほとんどが百済仏で、高句麗仏が希少で価値があったためだけではあるまい。そもそも馬子の最初の師がもと高句麗僧の恵便であっただけに、彼は百済のみならず高句麗文化への憧れも強かったと推定される。よって推古三年来朝の慧慈を翌年に飛鳥寺へ入寺させたのも馬子の差配とみてよく、かかる一連の流れにより遂に大興王の黄金施人をみたのも頷ける。おそらくはこうした高句麗と馬子との繋がりにより、高句麗仏が飛鳥大仏の面貌の手本とされたのであろう。ちなみに本像に近い面貌、ならびに同様の着衣形式であらわされた法隆寺献納宝物一五〇号の如来立像は、あるいは鳥が馬子に献じた「仏の本」から派生して飛鳥寺に近い環境下でつくられた像かもしれない。

六、飛鳥大仏の造形と機能―結びにかえて

もっとも蘇我馬子が飛鳥大仏に鑄立った厳しい面貌を求めた事情については馬子の高句麗仏への単純な嗜好だけではなく、第四章で

述べた本像の機能に関わるより重要な意図もあったと考えられる。

従来、本像をはじめ法隆寺像などにみられる神秘的で厳しい表情については、幸いを与えたとともに崇りすらなすが国の神と、外来の仏神とのオーバークラップによる表現とみる説⁽⁵⁹⁾が有力視されていた。これは馬子の仏教信仰が在来の神祇信仰のなかで消化されたもので、祖霊祭祀の延長上で展開したとのみかたが定着していたことに起因するのであろう。しかし前章で述べたように、馬子の仏教信仰はそのような土俗的な信仰ではなく、大陸のそれを忠実に受容したものであったとの私見を先稿で提示した。それゆえ私は馬子が飛鳥大仏の面貌に厳しさを求めた理由は別にあると考えている。

そこで一推論ではあるが、先の丈六光銘の願文が語るような、時空を超えて遍満するすべての衆生を救い導く、絶対的な超越者としての如来のイメージを本像に投影しようとした際、高句麗仏の厳しく神秘的な王侯風の面差しはものごと馬子の心を射止めたものではあるまいか。古来より絶対的な宗教權威としてわが国に君臨してきた祖霊ないしは祖先神すらも衆生として救済する、浄土の教主で法界の帝王、如来⁽⁶⁰⁾。その如来を飛鳥寺の本尊として表現する際、百済仏にみられる柔和で穏やかな面貌では不都合で、鎬立った威厳ある表情こそ馬子にとっては理想的だったのであろう。また仏教が説く真の如来の何たるかを理解し難い周辺の人々へ向けても、有情として祖霊をも救済する超人的な如来の特性を知らしめるに相

応しい面貌表現であったとみてよい。

以上の私見から、前章で述べた本像の現当二世にわたる救済の機能と、教材的機能はその面貌の表現と密接に関連していたと推定されるが、如来という超越者のイメージは本像全体にも及んだであろう。その意味では色身（生身）の仏の身の丈つまり一丈六尺の像として制作された本像に、仏が具える身体的特徴すなわち相好の表現は不可欠であったと推察される。これに関連して長岡龍作氏は百済大寺の丈六本尊（のちの大安寺釈迦像）が完璧な相好を有する像で、相好の表出こそが百済大寺本尊の生身性を支えていたと論じたが⁽⁶¹⁾、私はかつて飛鳥大仏をこの像の先蹤と捉えて造像の実態を考察したことがある⁽⁶²⁾。かかる私見からすると、わが国最初の丈六像である飛鳥大仏ですでに相好の表象がみられるのは当然で、のちの百済大寺本尊ではこれを継承しつつもより徹底させ、理想的な相好の表出に成功したのであろう。

それゆえ本像の頂髻相（肉髻）や縵網相、鍍金による金色相などはむろんのこと、見開いた大きな杏仁形の両目は三十二相中の真青眼相を、またやや寸詰まりにみえる法隆寺像の体軀に比して、腰部が安定し、かつ上半身の姿勢を真っ直ぐに正したように、のびやかにつくられた体軀は上身如獅子相、あるいは大直身相を意識した結果と考えられる。なおこれについての詳細は稿を改めて論じたいが、いずれにしても飛鳥大仏はのちの百済大寺や川原寺、薬師寺な

ど、大寺院の丈六本尊の先達ともいふべき史的意義を有していたことは誤りないであろう。これはひとえに願主の馬子が優れた仏教信仰の理解者であったことに起因するのであり、本像こそまさに当代最初の正当な仏教理解によって成った記念碑的な丈六仏だったのである。

(令和六年十月二十二日成稿)

注

- (1) 中野聰「蘇我馬子の仏教信仰と飛鳥大仏」『佛教史研究』五九、令和三年。
- (2) 例えば、石田茂作『飛鳥随想』学生社、昭和四十七年など。
- (3) 例えば、大橋一章『飛鳥の文明開化』吉川弘文館、平成九年など。なお丈六光銘の全文は、田中卓「元興寺伽藍縁起并流記資財帳の校訂と和訓」『南都仏教』四、昭和三十二年を参照。同銘は冒頭の「天皇名広庭」から「以建元興寺」までが前半部分で、続く「十三年歳次」から最後の「坐於元興寺」までが後半部分だが、前半部分が天智朝頃に成立した机上の縁起と推定される一方(中野聰「飛鳥寺の丈六光銘について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊―四五、平成十一年)、後半部分は推古朝の原銘にほぼ忠実とみられる(大橋一章「飛鳥寺の創立に関する問題」『佛教藝術』一〇七、昭和五十一年)、註(一)中野前掲論文。
- (4) 毛利久「飛鳥大仏の周辺」『佛教藝術』六七、昭和四十三年。
- (5) 藤澤一夫「所謂止利仏師と元興寺造仏に就いて」『古文化』一一一、昭和二十七年。
- (6) フランソワ・ペルチェ「飛鳥寺問題の再吟味」『佛教藝術』九六、昭和四十九年。
- (7) 町田甲一「元興寺本尊飛鳥大仏」『国華』九四二、昭和四十七年、註

- (8) 大橋氏前掲論文。なお飛鳥寺と飛鳥大仏の研究史については、川村知行「元興寺縁起と飛鳥大仏」(大橋一章編『寧楽美術の争点』ゲラフ社、昭和五十九年)に詳しい。
- (9) 坪井清足「飛鳥寺」『美術文化シリーズ』中央公論美術出版、昭和三十九年。
- (10) 『書紀』推古四年十一月条に「是日慧慈、慧聡二僧始住於法興寺。」とある。
- (11) 福山敏男「飛鳥寺の創立に関する研究」『史学雑誌』五四―一〇、昭和九年、同「飛鳥寺の創立」(同『日本建築史研究』墨書書房、昭和四十三年)。なお後者は前者を加筆修正したもの。
- (12) 本文中に記した「先稿」とはすべて、註(一)中野前掲論文を指す。
- (13) 註(10)福山氏前掲論文。
- (14) 例えば『書紀』推古十六年四月条には「小野臣妹子至自大唐。唐国号妹子臣曰蘇因高。即大唐使人裴世清、下客十二人、從妹子臣、至於筑紫。」などあり、副使の名はみえない。
- (15) 『書紀』推古十四年四月八日条に「丈六銅像坐於元興寺金堂。時仏像高於金堂戸、以不得納堂。於是、諸工人等議曰、破堂戸而納之。然鞍作鳥之秀工、不壞戸得入堂。即日設齋。」とある。
- (16) 『書紀』推古十四年五月五日条には「勅鞍作鳥曰、朕欲興隆内典、方將建仏刹、肇求舍利。時汝祖父司馬達等便献舍利。又於国無僧尼、於是、汝父多須那為橘豊日天皇出家、恭敬仏法。又汝姨嶋女、初出家為諸尼導者、以修行釈教。今朕為造丈六仏以求好仏像、汝之所献仏本、則合朕心。又造仏像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戸。然汝不破戸而得入。此皆汝之功也。即賜大仁位。因以給近江国坂田郡水田廿町焉。鳥以此田為天皇作金剛寺。是今謂南淵坂田尼寺。」とある。
- (17) 註(10)福山氏前掲論文。なお福山氏は『扶桑略記』が引く『法華驗記』所引の「延暦寺僧禪岑の記」記載の司馬達止来日記事末尾にある「縁起に出ず。」との記述から、坂田寺縁起が実在の文献であることを明確にしている。
- (18) 敏達紀の当該箇所については註(一)中野前掲論文で詳細に考察した。鞍作鳥の実像については諸説あるが、鳥を工と記す坂田寺縁起の内容に照らすと仏工であったとみてよい。なお鳥をめぐる研究史について

は、岩佐光晴「止利仏師に関する研究史をめぐって」(『美術美術史論集』二〇、平成二十五年)に詳しい。また坂田寺については、福山敏男『奈良朝寺院の研究』(高桐書院 昭和二十三年)を参照。ただし紙数の関係上、同寺創立の詳細については稿を改めて論じたい。

- (19) 註(7) 町田氏前掲論文。
(20) 註(3) 大橋氏前掲論文。

- (21) 知恩院本『上宮聖徳法王帝説』の裏書には「戊寅年十二月四日、鑄丈六仏像。(中略) 乙酉年三月廿五日、点仏眼。」とある。

- (22) 註(5) 藤澤氏前掲論文。ただし藤澤氏は前章で取り上げたように、塔露盤銘中の「□人」を「金人(仏像)」すなわち本像と解したうえで、推古四年を制作開始年に充てている。

- (23) 註(10) 福山氏前掲論文。福山氏は黄金の寄進を後世の創作とするが、大橋氏がいうように、大興王の寄進は原銘に記載されていることであり、慧慈の飛鳥寺止住なども考慮すると(註(3) 大橋氏前掲論文)、史実に違いない。

- (24) 註(3) 大橋氏前掲論文。

- (25) 『書紀』推古十年潤十月十五日条に「潤十月乙亥朔己丑、高麗僧僧隆、雲聰共來帰。」とある。

- (26) 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所昭和三十三年など。

- (27) 註(26) 前掲報告書。

- (28) 註(26) 前掲報告書。なお王興寺については、鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』(勉誠出版、平成二十二年)を参照。

- (29) 塔露盤銘の全文は、田中卓「元興寺伽藍縁起并流記資財帳の校訂と和訓」『南都仏教』四、昭和二十二年を参照。

- (30) 佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎施設・舍利奉安形式の系譜」(註(28) 鈴木氏編前掲書)。

- (31) 李炳鎬・金志虎訳「百済の寺院からみた飛鳥寺三金堂の源流」(『奈良美術研究』一四、平成二十五年)。

- (32) 小泉頭夫氏は八角形の建物を仏塔とみなしている(小泉頭夫『朝鮮古代遺跡の遍歴』六興出版、昭和六十一年)。

- (33) 田中俊明「高句麗の寺院」(東潮・田中俊明編『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、平成七年)。

- (34) 光森正士「古代寺院の礼拝空間についての試論」(『龍谷史壇』九三・九四、平成元年)。

- (35) 玉石積みを用いた二重基壇の東西付属堂舎は構造的にも意匠的にも、塔や金堂より格の低い建物であることが報告されており(註(26) 前掲報告書、副次的な付属堂舎であることを示唆している)。

- (36) 註(26) 前掲報告書。

- (37) 長岡龍作「仏像をめぐるいとなみ」(同氏編『講座日本美術史』四 東京大学出版会、平成十七年) など。

- (38) これらの説話については、出雲路修校註『日本霊異記』(『新日本古典文学大系』三〇 岩波書店、平成八年)を参照のこと。

- (39) 註(4) 毛利氏前掲論文。

- (40) 註(2) 石田氏前掲書など。現状の詳細は後掲の報告を参照のこと。

- (41) 櫻庭裕介「飛鳥寺本尊丈六釈迦如来坐像について」(『奈良美術研究』一四、平成二十五年)、同「飛鳥大仏のX線分析と制作技法について」(『奈良美術研究』一五、平成二十六年)。

- (42) 藤岡穰・犬塚将英・早川泰弘・皿井舞・三田寛之・八坂寿史・関内賛・朴鶴洙「飛鳥寺本尊 銅造釈迦如来坐像(重要文化財) 調査報告」(『鹿園雑集』一九、平成二十九年)。のち藤岡氏執筆の箇所のみ、藤岡穰「東アジア仏像史論」(中央公論美術出版、令和三年)に再録。

- (43) 『上宮太子拾遺記』第二に「建長七年丙辰六月十七日亥時、為雷火令炎上了。寺塔無殘。但仏頭手殘云々。以上泉高父私記文也。」とある。

- (44) 大橋一章「飛鳥大仏の制作と火難」(『奈良美術研究』一四、平成二十五年)。

- (45) 本稿以前にすでに紺野敏文氏が着衣形式や両手の構えなどは旧來のかたちをなぞって修復された結果であると推定している(紺野敏文「請来『本様』の写しと仏師(一)」『佛教藝術』二四八、平成十二年)。
- (46) 久野健「飛鳥大仏論」(『美術研究』三〇〇、三〇一、昭和五十年)、同「飛鳥白鳳天平仏」法蔵館、昭和五十九年。

- (47) 大西修也「再建法隆寺と金堂薬師如来坐像」(太田博太郎ほか監修『法隆寺』(『名宝日本の美術』二) 小学館、昭和五十七年)。

- (48) 水野敬三郎「釈迦三尊と止利仏師」『奈良の寺』三、岩波書店、昭和四十九年。
- (49) 松田誠一郎「飛鳥・奈良Ⅰ（白鳳）時代」(辻惟雄監修『カラー版日本美術史』美術出版社、平成三年)。
- (50) 飛鳥大仏は法隆寺像のように內衣を腹部近くまであらわにせず、わずかに胸部のみをU字形に露出させ、さらに後補ながら左手をこれよりかなり下方の膝上に置いたため、新形式の着衣法と推察される。もっとも田辺三郎助氏はこれを旧形式の変形とみているが(田辺三郎助「葦原石窟の北魏造像と飛鳥彫刻」『中国石窟葦原石窟寺』平凡社、昭和五十八年)、果していかなるものであろうか。
- (51) 上原和『仏法東流』学生社、昭和六十二年。
- (52) 藤岡穰「中国南朝造像とその伝播」(註(42)藤岡氏前掲書)。
- (53) 毛利久「三国彫刻と飛鳥彫刻」(田村圓澄・黄壽永編『百済文化と飛鳥文化』吉川弘文館、昭和五十三年)、吉村怜「日本早期仏教像における梁・百済様式の影響」『佛教藝術』二〇一、平成四年)、大西修也「百済仏立像と一光三尊形式」『MUSEUM』三一五、昭和五十二年)など。
- (54) 吉村怜「止利式仏像と南朝様式の関係」『佛教藝術』二一九、平成七年)、註(52)藤岡氏前掲論文。
- (55) 註(53)大西氏前掲論文、岡田健「仏教彫刻における朝鮮半島と中国・山東半島との関係」(文部省科学研究費補助金「日韓両国に所在する韓国仏教美術の共同調査研究」研究成果報告書 奈良国立博物館、平成五年)など。
- (56) 藤岡穰「飛鳥大仏―総合調査に基づく考察」(註(42)藤岡氏前掲書)。
- (57) 大橋一章「古代文化史のなかの飛鳥寺」(鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版、平成二十二年)。
- (58) もっとも中国では龍興寺址出土の如来立像中の数例のように、飛鳥大仏と同様の作例が見いだされる点、留意する必要がある。しかしこうしたタイプの像は現存作例をみるかぎり、朝鮮半島では定着しなかったのではあるまいか。むしろ飛鳥寺伽藍全体に百済式と高句麗式の併存が見いだされる点を鑑みると、両者の仏像様式を折衷して鳥が飛鳥大仏を完成させたと現時点では推定しておきたい。

- (59) 石田一良『形と心―日本美術史入門』芸艸堂、昭和五十年。また紺野敏文氏によると、止利様式に求められたのは古墳時代の神観念の造形で、大陸の造形品質よりも日本在来の受容環境にかなう古い神呪性の表象が優先されたという(註(45)紺野氏前掲論文)。

- (60) 例えば『法華経』比喻品では、釈迦自らが「我は為れ法王にして法において自在なり。」と説いている(『大正新脩大蔵経』九一―一五b)。
- (61) 長岡龍作『日本の仏像―飛鳥・白鳳・天平の祈りと美』中央公論新社、平成二十一年。
- (62) 中野聰「百済大寺の本尊に関する考察」『奈良美術研究』六、平成二十年。

重要史料

① 丈六光銘

天皇名広庭、在斯婦斯麻宮時、百済聖明王上啓、臣聞、所謂仏法既是世間無上之法、天皇亦応修行、敬奉仏像經教法師。天皇詔巷哥名伊奈米大臣、修行茲法。故仏法始建大倭。広庭天皇之子多知波奈土与比天皇在夷波礼池辺宮、任性広慈、信重三宝、損棄魔眼、紹興仏法。而妹公主名止与弥拳哥斯岐移比弥天皇在楷井等由羅宮、追盛池辺天皇之志、亦重三宝之理、指命池辺天皇之子名等与刀弥々大王、及巷哥伊奈米大臣之子名有間子大臣、聞道諸王子教縑素。而百済惠聡法師、高麗惠慈法師、巷哥有間子大臣長子名善徳為領、以建元興寺。十三年歲次乙丑四月八日戊辰、以銅二万三千斤、金七百五十九兩、敬造尺迦丈六像、銅繡二軀并挾持。高麗大興王方睦大倭、尊重三宝、遙以隨喜、黄金三百廿兩助成大福、同心結縁。願

以茲福力、登遐諸皇遍及含識、有信心不絕、面奉諸仏、共登菩提之岸、速成正覺。歲次戊辰大隋國使主鴻臚寺掌客斐世清、使副尚書祠部主事遍光高等來奉之。明年己巳四月八日甲辰、畢竟坐於元興寺。

②塔露盤銘

大倭國天皇斯埴斯麻宮治天下名阿米久爾意斯波羅岐比里爾波乃弥己等之世、奉仕巷宜名伊那米大臣。時百濟國正明王上啓云、万法之中仏法最上也。是以天皇并大臣聞食之宣、善哉、即受仏法、造立倭國。然天皇大臣等受報之業盡。故、天皇之女佐久羅韋等由良宮治天下名等已弥居加斯支夜比弥乃弥己等世、及甥名有麻移刀等已刀弥々乃弥己等時、奉仕巷宜名有間子大臣為領及諸臣等。讚云、魏々乎、善哉々々、造立仏法父天皇父大臣也、即發菩提心、誓願十方諸仏、化度衆生、國家大平、敬造立塔廟、緣此福力、天皇大臣及諸臣等過去七世父母、広及六道四生衆生々々処々、十方淨土、普因此願、皆成仏果、以為子孫、世々不忘、莫絶綱紀、名建通寺。戊申、始請百濟寺名昌王法師及諸仏等、改遣上釈令照律師、惠聰法師、鏤盤師將德自味淳、寺師丈羅末大、文賈古子、瓦師麻那文奴、陽貴文、布陵貴、昔麻帝弥。令作奉者、山東漢大費直名麻高垢鬼、名意等加斯費直也。書人百加博士、陽古博士、丙辰年十一月既。爾時使作□人等意奴弥首名辰星也、阿沙都麻首名未沙乃也、鞍部首名加羅爾也、山西首名都鬼也、以四部首為將、諸手使作奉也。

